

人生の解釈学：人生の不条理にどのようにアプローチすべきか

野田啓介 Ph.D.
統一神学校ベリータウン大学教授 哲学

要約

人生は謎だらけです。その謎には、哲学の難問が絡みついでいて、容易に答えられない問題ばかりです。包括的な人生哲学を構築するには、背後にある哲学の難問をとかねばなりません。本論文は、予備的な考察として、人生問題への解釈学的なアプローチの可能性を探ります。

人生の問題に、解釈学、「意味」をベースにしたアプローチをしたのが哲学ではハイデッガー、精神医学ではヴィクター・フランクルです。両者の洞察を踏まえながら、統一思想を背景にした人生の解釈学の可能性を探りました。

人生の解釈学は、人生を「試練と応戦」のダイナミックな授受作用ととらえ、価値が実現していく過程であると捉えるところに成立します。人生には、ある種の試練が本来的に組み込まれていて、その試練に対応することを通して、自分の人生の「意味」が開示されてゆきます。試練に「意味」を見いだせるかどうかは鍵となります。試練の前で、絶対的な不可侵の領域、「内的な自由」を失うと人は、人生に意味を失い「実存的空虚」(“Existential Vacuum” by Viktor Frankl)に陥ることがあります。統一思想における、愛、創造性、本来性は、三つの基本的な人間の可能性であり、試練を通して開かれ、人間は、成熟するようになっています。試練への応戦は、自分のこの可能性を開き、他者と世界に貢献してゆく機会でもあります。挑戦と応戦は、自分に備わっている愛と創造性、そして本来性を開き、同時に、他者に貢献し寄与してゆく人生の仕組みであり、そのメカニズムを通して価値があらわにされてゆきます。

序論

人生は試練の連続です。試練の中には私たちが対応しうる力を遥かに超えたものもあります。最も大きな問題は、その挑戦がどのような意味をもっているか不明瞭だということです。人生にどうしても挑戦がつきものなのでしょうか？ 私たちがは、どのように対応すべきでしょうか？ 「人生の意味」というのは、実は、極めて複雑な問題です。そこには神義論（全知全能で愛の神が、なぜ悪の存在を許している、もしくは放置しているのか）、

人生の不確定性、運命、運、自由、人間の本性、価値等、さまざまな問題が副ザルにからんでいます。

こうした多様な問題の中で、第一の問題は、どのように人生の問題にアプローチすべきかという問です。この論文では、人生問題にたいして、解釈学的なアプローチが妥当である理由を明らかにしたいと思います。統一思想の本性論をベースにして、解釈学的アプローチを取ったハイデッガーとヴィクター・フランクルに言及しながら、分析を進めてゆきたいと思います。

注：本論文は「人生の解釈学」という大きなプロジェクトの一部です。そこでは、哲学、心理学、神学の関わる人生の複雑な問題に包括的に取り組んでいます。

1. 人生の不条理：答えのない人生

人生は謎に満ちています。人は必然的に問いに巻き込まれるのですが、そこには確実な答えがありません：なぜ自分は生まれたのか？かくも苦しみと不条理に満ちた世界に？自分はなぜこのような姿と有様で生まれたのか？苦しみに直面し続けると、なぜ自分は生き続けなければならないのか、どうして今、死んではいけないのかと問わざるを得ません。自殺者を非難するのは容易いのですが、「なぜ人は生き続けなければならないのか？」という問いに、簡単には答えられません。

人生は気づいた時には、既に始まっています。ですから回顧する形で、振り返り、その意味を問わざるを得ません。ちょうど、気づいた時には既に列車の中にいる人のようです。どこから来たのか、どこに行くのか、どうしてそこに乗っているのかもわからずに。ちょうどミステリー列車に乗っている人のように、問を解くという課題に直面しながら。

人は、特定の父母から生まれ、その遺伝子を受け継ぎ、精神的、肉体的形質と病、家庭環境を与えられて生まれます。社会環境、生まれた時代と環境、いずれも選択の余地なく与えられて生まれます。「なぜ僕を生んだの？」と父母に問えば、「なぜお前が私たちから生まれたのか？」という答えが返ってきます。誰もこうした問いに答えられません。

人は、神にたずねるかもしれません。しかし、信仰の世界に入ったとしても、多くの問いに直面します。まずは神義論の問題です。もし全知全能で、愛の神がいるとするならば、どうしてこの世にかくも悪がはびこっているのでしょうか？悪の存在は、神の存在への反証のひとつです。

問いは、さらに広がります。「神は、私の人生に関わっているのだろうか？もし、そうなら、どのように関わっているのだろうか？」ある人は、銀のさじを持って生まれ、ある人は貧民窟に生まれ、ある人は、健康で生まれ、ある人は精神的、肉体的に障害をもって生ま

れる。「神は、公平なのか?」「神は、人の祈りに応えるのか?どのように、どの程度?それとも応えないのか?どうして?」そこには確実な答えがありません。

人生の過程で、事故、災害、病気、社会的歴史的変化等、多くの事柄が人生に降りかかります。しかも、確実な答えはどこにもありません。人生は、不条理であると言わざるを得ません。

2. 人生の問いにどうアプローチするか?

A. 心理的資産の限界

人間がプロセスできる情報には限界があります。チクセンミハイリは、Positive Psychology のパイオニアの一人ですが、脳がプロセスできる情報の限界について述べています。人は、一秒間に、110ビットしかプロセスできません。誰かの話を理解するには一秒あたり40ビット必要です。そのため、通常、人は二人の人が同時に話しかけた場合、交互に二人と話すことはできますが、両方同時に理解することはできません。一日16時間、人生75年とすれば、一生で1730億ビットが限界です。

経験が意味あるものとしてプロセスされるためには、意識を経過せねばなりません。

人生のすべての経験—思考、感情、欲望、記憶、行為、会話、成し遂げること—は、意識のスクリーンを通過せねばならず、1730億の一部を使います。「人生」とは、こうしたフィルターを通過したその総体に過ぎません。¹

各人の心理的資産は、このように量的な限界があります。以下にそれを使うかは、その人次第です。人生のクオリティーは、どのようにそれをを用いるかにかかっています。

B. 解釈：意味からのアプローチ

解釈は、あらゆるレベルで働いています。知覚のレベルでも働いています。人が物音を聞いた場合、過去の経験に照らしてその正体を見出そうとします。ものを見分けるプロセスは、ひとつの解釈です。もし、経験したものが、自分の過去の経験や予測しうる将来の経験に照らしても、不明の時は、さまざまな見方をして、そこから「意味の通じる」ものを探してゆきます。

¹ Csikszentmihalyi, Mihaly. *Good Business: Leadership, Flow, and the Making of Meaning*. New York: Viking, 2003, p. 78

人生の不条理は、出来事や経験の意味を見いだせないことから生まれます。問題は二つのレベルにあり、ひとつは出来事を解釈するための枠組みそのものがない場合、つまり人生全体の意味が不明の場合、もうひとつは、その出来事そのものが不可解、意味がわからない場合です。この論文は、人生を解釈する際の手がかりを探る試みです。

3. ハイデッガーの解釈学的アプローチ

A. 「関心」としての人間存在

どうして「意味」が、人間の存在にとって大切なのでしょうか？ハイデッガーは、20世紀で最も影響力のあった哲学者ですが、こう答えています。「人間は、その存在（生存）の意味が常に問題であるような存在である」物体は、自己意識を持ちません。²

では人にとって、なぜ「意味」がそれほど重要なのでしょうか？ハイデッガーは、「人間がケア（関心）」として存在しているからだといいます。平易な言い回しをすれば、人は喜んだり、悲しんだり、幸せを感じたり、果ては悲しみにくれ、絶望させます。人は、どのように自分が存在して（生きて）いるのか、いつも気にかけて存在しています。こうした「関心」をもった在り方をまずしているのでなければ、人は、疎外感を感じたり、自分の生の無意味さを感じることもありません。「関心」という存在の仕方が既にあるがゆえに、自分が本来的な在り方をしていなかったときは、それを感じるすることができます。

統一思想で言えば、これは人間が「心情」として存在している点(本性論)に対応しています。

この「関心」としてのあり方は、個人と世界、環境をつないでいます。人は、空の入れ物の中に存在する物体のように存在するのではなく、他者とのいろいろな関係を結びながら世界の中に存在しています。ハイデッガーは、こうした人間のあり方を、「世界内存在」と呼びました。世界の関係的なあり方と「関心」として人間の在り方は、対応しています。

B. 世界の目的論的構造

では、このような「関係」の本質は、どういうもののでしょうか？ハイデッガーは、目的論的であるとこたえます。私たちは、存在の意味をまずその「目的」から理解します。例えば、ハンマーは、釘、材木、金具を指示し、それらは家を指示します。そして、その家は人指示します。ハンマーの意味を、このような多様の目的関連から、理解します。物体は

² 意識の「志向性」は、ブレンターノ、フッサールが詳細に論じましたが、ハイデッガーは、それを踏襲し、存在的に発展させ取り込みました。

相互に他の物体を指示し、究極的には人を指示します。このように、存在の意味は、その諸目的から理解します。

ハイデッガーは、さらに物の目的論的な在り方が主要な在り方で、物体の物質性は、二義的なものだといいます。物体の物質性は、目的連関が敗れた時、例えば、ハンマーが壊れてしまったとき、鉄や木としての在り方があらわになるといいます。通常の場合では、物は、その目的から理解されるようになっているといえます。

このハイデッガーの論点は、統一思想で言えば、世界が二重目的からなっていることに対応しており、ハイデッガーは、『存在と時間』において、デカルトへの批判も含めてその在り方を詳しく論じています。

実際、どのように私たちは、身の回りにある世界を理解しているのでしょうか？私たちは、普通、生活の文脈から理解しています。例えば雨は、どうでしょう？H₂Oとしての水は、科学的な視点から見たときにあらわになり、雨は、通勤する人には、道路がぬかるみですべりやすいから注意深く運転するようとか、濡れないように傘を持って行けとか、農家の人には作物に必要なものであり、日照りの地域には天の恵みであったりします。雨の存在の意味は、科学的、技術的なものであるだけでなく、実践的、美的、神秘的、宗教的とさまざまです。

ハイデッガーが人間の解釈学的な在り方を論じた後、ガダマーは、解釈学の普遍性を論じました。ガダマーは、啓蒙思想の主張した知識の「中立性」で、解釈の及ばない知識、権威や伝統の排除等を批判しました。ガダマーは、権威と伝統なしには知識は成り立たないこと、人間は「前理解」なしには「理解」し得ないこと、「理解」は必然的に解釈であること等を論じました。

3. ヴィクター・フランクルによる「意味」を基盤にしてしたアプローチ

人間を行動に駆り立て、動かす根本的なものは、なんでしょうか？快楽、権力意志、あるいはその他のものなのでしょうか？フロイドは、快楽原理、特に性欲をもとにして、理論を組み立てました。フロイドを抜きにしたとしても、快楽原理は、確かに人間を動かす最も強い原理のひとつです。

A. 喜びと快楽：人間行動の主要原理

快楽は、欲望を満たし、感性を直接的に刺激して得られます。生活の中で快楽を求める手立てとして、富や権力を求めます。快楽を求め、苦痛を避けるのは、否定しがたい支配的な行動の原動力のひとつであるように思います。

快楽を求めることは、それ自体では、自然的なことであり、人間の感覚に備わっているようです。快楽が全くない生活は考えられません。食べるとこ、飲むことは栄養を補給するためだけではなく、美味しく感じるためでもあります。どうして人は音楽を聴きたがるのでしょうか？調和にみちた音楽や、良い声は、感性に喜びを与えてくれるからです。適切な気温、湿度は、心地よい感覚を与えてくれます。このように、快楽は、普遍的で、必要なものです。

快楽が、生理学的な刺激であるのに対し、完成的な刺激がなくても喜びを感じることもあります。例えば、誰かを助けて上げる場合です。自分自身は、快楽を得るわけではありませんが、人を助けて上げて喜びを感じます。自分が犠牲になる場合すらあります。その他、真理の発見、夢や理想の実現、正しいことをした時などです。快楽と喜びには、その意味で、明確ではありませんが、違いがあります。ウェイトや強調するところが違うという程度の違いですが。

喜びは、価値の指標を含んだ包括的な概念です。喜びは、ある価値の枠組みの中で、快楽をも含んでいます。快楽が、直接的で、一時的な自己の欲望を満たすことを意味するのにに対し、喜びは、幸福を含む、より広範な経験を意味します。

快楽は、それ自体では、価値の要素を含みません。喜びは、価値を含んでいます。快楽は、善悪、正邪、その他の価値判断を抜きにしても感じるすることができます。事実、自分の価値判断に反して、快楽を追求することもあります。アル中、ギャンブル中毒、性への耽溺、薬物中毒、習慣性の万引き等は、価値に反しながらもある種の快楽が、原因になっているところがあります。こうした行動は、満たし得ない心の虚しさを、快楽で埋めようという、虚しい企てです。

B. ヴィクター・フランクルの経験

限界状況の生活は、人生の問題を先鋭化します。希望のない状況の中で、どうして人は生きてゆかなければならないのでしょうか？こうした人生の試練ともいえる問いは、ナチスのアウシュビッツ強制収容所などの状況は、その典型的な例です。

ヴィクター・フランクルは、オーストリア生まれの精神病理学者で、アウシュビッツを含む強制収容所に、1942年から1945年まで収容されました。父母、妊娠していた妻、兄弟も、皆、殺されました。1945年に解放されてから、多くの著書と講演をしました。限界状況下での人間の有様について分析し、『それでも人生にイエスと言う』（邦訳のタイトル。英語版は、*Man's Search for Meaning*）を含む著書に表しました。

フランクルは、収容所における生活を何段階に分けて説明しています。収容所に到着した囚人は、最初にショックを受けます。普通の人々が、急に収容所に連れてこられた時のシヨ

ックは想像できます。どうしてそんなことが身に降りかかったのか、どのにも答えがありません。過酷な事実直面し、皆、混乱します。誰の心にも、一度や二度は「自殺」がよぎるとフランクは、書いています。高圧電流の流れるフェンスに向かって走れば死ぬことができます。しかし、「いずれ死ぬ」ことがわかると、もはや自殺の思いはなくなるといいます。第二の段階は、無関心です。

アパシー（無関心）、他の人をもう気にかけることができないという感情と情の鈍化は、囚人の第二段階における心理的な症状です。これによって、日々の、そして時間毎の殴打へも感じなくなることができます。その感覚の鈍化によって、囚人は、自分を守る殻を作り上げます。³

痛みと苦しみそのもので、人は必ずしも無関心になるわけではありません。むしろ、その苦しみの不条理さの故であると、フランクは言います。食事の列に並んでいた時のことです。看守がいきなりフランクを殴りつけました。「もっとも辛かったのは、肉体的な苦痛ではなく、その不正と不条理でした」⁴ 無関心というものは、一種の自分を守るメカニズムのようです。

解釈は、経験を人生全体に組み込むメカニズムです。経験が、不可解、不条理、不正であったとき、そしてそれを統合できなかつたとき、人は距離をとるようです。問題から、自分を遠ざけ、自分を守ろうとするために、無関心になるのだと思います。

強制収容所では、囚人は、あらゆる肉体的精神的虐待に無力です。フランクは、その無意味さ、不条理が一番苦しいことだったと回顧しています。これは、苦痛には精神的、霊的側面があることを示唆しています。ちょうど快樂に対比して、「喜び」が価値の要素を含んでいるように、人間の苦痛には価値の面が含まれています。痛みが、不正、悪、もしくは理解できない不条理によってもたらされたとき、人は苦悩を、肉体に痛みよりも最も深く感じます。無関心は、それを避けるメカニズムです。

人間には、本来、諸経験を人生全体として統合しようとするメカニズムが備わっているようです。そのために、「無関心」という防衛メカニズムが働くように思われます。一つ一つの経験の意味は、幾重もの人生の文脈に照らして解釈され、意味が生まれます。アパシーというのは、人生を意味あるものにするこのメカニズムがうまく機能しなくなったからではないかと思えます。アパシーは意図的にする行為というよりは、解釈のメカニズムの不具合、麻痺のように思えます。

³ Frankl, Viktor E. *Man's Search for Meaning*. Boston: Beacon Press, 2006, p.23.

⁴ Ibid., p. 24.

「人生に起こるさまざまな出来事が、どうしたら納得いくものになるだろう？」この問いは、人生の根底にあります。日常生活で、いつもこうした疑問を投げかけるわけではありません。出来事が、人生の諸文脈にうまく適合していた場合は、別に考えることもなく、当然の事柄としてやり過ごします。しかし、出来事が自分の対処しうる能力を越え、限界を超えていた場合、対応能力そのものが麻痺します。アパシーは、まさに、こうした麻痺状態です。

強制収容所で、フランクは囚人が植物状態に陥るのを見ました。周りで起こることに一切無感情で、無関心でした。意味がなくなり、解釈の機能が麻痺したとき、人は、植物状態に陥りました。周りの人の死すら何の感情も呼び起こしませんでした。

収容所での生活は、生存そのものが困難なものでした。栄養失調、最悪の健康状態、強制労働、日常的な暴力、想像しうる最悪の状況が現実としてありました。弱いとみなされた途端にガス室に送られます。かかる状況下で、環境は人を死に向けて追い立てて行きます。死のうと思えばいつでも死ぬる状況です。生きようとしたところで、殺される状況です。

C. 運命的な状況にたいして、自分の態度を選ぶ自由

フランクは、運命的な状況にたいして、自分の態度を選ぶ自由があることを見出しました。

数は多くはなかったのですが、すべてが剥ぎ取られた条件下でも、自分の態度を選ぶ自由があることを証明した人々がいました。⁵

態度を変えること、これが人生を意味あるものに変える鍵になると、フランクはいいます。それは、人間を非人間的な植物状態に変えようとする力に抗して、人間の条件の勝利の瞬間です。

睡眠不足、不十分な食べ物とあらゆる精神的なストレスによって、囚人は、それに応じた生を営むように仕向けられるのですが、私の最終的な分析によれば、囚人が結局どういう人間になるかは、最終的に本人の内的な決意であり、環境の影響だけではなかったということです。ですから、どんな人も、かかる状況下でも、心理的にも霊的にも、どういう人になるかは、人は自分で決めることができるということです。⁶

「霊的な自由」の発見は、すべての可能性を剥奪された状況下で、見出されました。いかなる力も、その「自由」、自分の態度の決める自由、自分で変えることができない状況に

⁵ 前掲書 p.66

⁶ 前掲書

対しどう向き合うかという「自由」を奪うことはできない。人は他人に凶暴な態度で接することもできましたし、また、親切にすることもできました。どのように生き、どんな人になるかは、その人の決定次第でした。

自由の復帰は、植物状態や野獣状態から脱して人間性に至る決定的なステップでした。植物状態では、「人生の意味」など問うこともなかったといいます。アパシーという情的には死んだ状態では、意味について問うこともありません。もし、そうした問を考えると、きっと絶望するからでしょう。絶望を避けるために、無関心状態になるのだと思います。もし人に、霊的な次元、意味を求めるメカニズムがもともと備わっていなかったら、アパシーや絶望状態になることはできないのではと思います。人間が、もとより意味を求める存在であるが故に、アパシーや絶望が可能になるのだと思います。

フランクが見たほとんどの囚人は、植物状態になったといいます。希望や機会を見いだせず、過去にのみ生きるようになった人もありました。

収容所のほとんどの人は、人生における現実的な機会は、すでに過ぎてしまったと思っていました。しかし、実際には、機会も試練もありました。経験を乗り越えることもできたし、人生から内的な勝利を得ることもできました。あるいは、試練を無視し、大部分の囚人がそうであったように、植物化してしまうこともできました。⁷

では、どうやって人は霊的自由を見出すことができるのでしょうか？少なくとも、頭では、試練に対してどういう態度をとるか、その自由をもっていると知っています。しかし現実には、現実のしがらみに縛られていると、観点を変えることは困難です。観点を変えようとする人に対し、現実は、飲み込んでしまうように迫ってきます。もし、難しくなければ、誰もが簡単に、それを見いだせたはずです。大部分の囚人が、植物状態になったのを見ても、それがどれほど難しいかがわかります。

D. 可能性としての自由

自由は、「対象」として見出される物のようなものではありません。自由は、人の「可能性」です。人が、自分が「できる」と気づいたとき、その可能性を自由としてとらえます。逆に、自分の可能性を見失ったとき、自由をみいだすことはできません。ですから、霊的自由を見出すためには、自分の可能性をみいださなければなりません。強制収容所の状況下で、生存の可能性、現実にはできることは少ないのが現実です。しかし、かかる運命的な状況に対して、どう向き合うかということを決めることはできます。苦難についても、どのようにその苦悩に向き合うかはその人の手にかかっています。「人がどう苦難に

⁷前掲書 p. 72.

耐えるかは、純然とその人が内的に到達するものです。この靈的自由こそ、誰も奪うことができないことであり、人生を意味あるものとし、目的あるものとするものです」⁸ たとえ力が肉体を鎖につないでも、心を鎖につなぐことはできません。いかに人がものを見、何を見、なぜ見、どう見るのかは、その人の見方にかかっています。誰も、どんな力も、この根本的な自由、靈的な可能性を奪うことはできません。

自由は、否定的に働くこともあります。たとえ外からの強制力がなくても、自分から外界との距離をおき、強制力を想像してつくり上げ、自分を縛ってしまうことがあります。絶望から、自殺することすらできます。人は内的な自由があるために、絶望することもできます。自分から、意識的に自分を拘束するものを作るわけではありません。それは内的自由を誤認です。内的自由があるが故に、自分を拘束することができます。そうしながらも、自分では、それに気づいてはいません。ちょうど自分が見ている観点というものは、自分には見えないように、自分が用いている内的自由に気づいていないわけです。

フランクフルは、その転換点が「意味をみいだす」ことにあると見ています。苦悩は人生の一部です。しかし、その苦しみにも「意味」があります。意味というのは、とらえどころのない概念です。人が、新しい意味を見出そうとするときは、現在の観点を離れ、意味を探求します。新たな意味を発見しようとする試みは、自分の理解が、現実にもっている観点によっていることを気づかせてくれます。観点こそが、人がもの見ることのできる限界、その地平をきめていることです。問題は、自分の「観点」こそが自分の理解を決定づけていることに気づかず、そして「観点」は変えられることに気付いていないことです。

フランクフルは自分が、収容所の生活で、劇的に見方を変えたときのことを述べています。未来から見て、その生活そのものを研究の材料と見るという観点です。フランクフルは、(想像上の)聴衆に向かって、収容所での体験を話している光景を見ました。

毎日、毎時間、瑣末なことに強いられている状態に、うんざりしていました。私は、あえて別のことを考えようと思いました。突然、明るく暖かい講義室の壇上に立っている自分を見ました。私の前には、ゆったりとした椅子に座っている聴衆がいます。私は強制収容所の心理学について、講義をしています！私を抑圧していたそのすべてが、離れた(未来の)観点から見た、科学の対象に変化したのです。⁹

フランクフルは、観点の転換により、自分の全状況を新しい光の下に見るようになったと述べています。「この方法により、この状況から、瞬間瞬間の苦しみから抜け出し、それが既に過去のことであるかのように見るようになることができました。自分自身と、自分

⁸ 前掲書 p. 67.

⁹ 前掲書 p.73.

が抱えている問題そのものが、興味深い心理学的科学研究の対象となったのです。」¹⁰
フランクフルトは、観点を定めることにより、収容所での全経験を、研究対象に変化することができました。三つの点を指摘しておきます。

その一。フランクフルトは、実際、将来、そんなことが起きるかどうかわかりませんでした。そうはならないかもしれませんが。収容所での、生存の可能性は、むしろわずかなものでした。不確定な未来に講義の機会が、実際どのように与えられるのか、そんなことがあるのか、全く知らない状況の中で、フランクフルトは、そうした観点をもちたということです。

その二。強制収容所における現在の生活の意味を、自分の生涯の目標に照らすことによって、変貌させたという点です。この文脈の転換なくして、収容所での苦悩は無意味です。自分の生涯の目標である研究を、解釈の文脈にすることによって、彼は、収容所での経験を、そこに統合することができました。彼の設定した目標が、日常経験を統合するのに適切であったともいえます。

その三。時間の転換があります。未来が、現在を見る決定的な視点となっています。もし彼が、現在に視点をおいて未来を見つめたなら、生存の可能性、希望もついていたと思います。現実から解放されるためには、「現在」から解き放たれる必要がありました。「未来への希望を失い、生きる意志を失った囚人は死んだ。未来を信じることを失ったとき、霊的な支えを失い、自分が精神的にも肉体的にも衰退するままにまかせた。」¹¹と述べています。過去に寄りかかって生きていた囚人もいたが、その人たちも、人生の意味を見失ったと述べています。

E. 日常生活における内的自由

強制収容所における状況を日常生活に当てはめてみます。人間には自分ではどうすることもできない運命的な無数の状況があります。DNA、生まれた家庭、自分が生まれた社会的、歴史的環境、自然災害、事故、突然の病、愛する人の死等。自分が「生まれた」という事実、これもどうすることもできません。事柄によっては、自分を飲み込んでしまうほど、大きな試練です。かかる状況下で、それに対処する力を失い、絶望することもあります。フランクフルトは、外からの力が決して奪うことのできない内的な自由、どういう人間になるかという自由、どのように解釈するか、どのようにその意味を見出すかという自由があるといえます。

人が自分の運命、苦悩を受け止める仕方、自分の十字架を背負うやり方には、深い意味をうむ機会があります。たとえ最も困難な状況においてもです。自己保存

¹⁰ 前掲書 p. 73-74.

¹¹ 前掲書

のための悲惨な闘いをして、人間としての尊厳を失い、動物同然になることもできます。ここにそれを利用するか、それとも困難な状況が与えてくれる道徳的価値を得るかの分かれ目があります。それが、その人が、苦悩にふさわしい人間であるかどうか決定します。¹²

自分が決めなければならないのは、自分の十字架を背負うかどうかという決意です。人はそれぞれ違う大きさの肩があるように、異なった運命と重荷を背負っています。自分の運命、自分の十字架に対してとる態度、それが内的な自由です。言い換えますと、人は、自分の十字架に対し、適切な態度をとるべく定められているともいえます。フランクフルは、こう言い換えています。人生の試練に答えようとするのではなく、自分の人生が、自分に投げかけている試練に、どう答えるのか考えなさいと。人生が投げかけている問いに、どう自分が答えを出してゆくのか、その責任があると。

霊的な自由の発見は、本来の自己を発見する鍵を握っています。統一思想の観点からみると、三つの自己の発見の仕方があります。愛、創造性、本来性（ロゴス、理法）です。本性論で述べている人間の本性というものは、挑戦と応戦、試練と対応のプロセスを通して、その可能性が開かれてゆくように思います。逆に言えば、人生には、ある種の自然的な試練（非本来的な悪の試練は、本来あるべきではありませんが）が組み込まれていて、それに対応するべく努力することによって、本性が現実化していくのだと考えます。

F. 実存的空虚

もし、自分の霊的自由に気づかなかった場合、人はどうなるのでしょうか？フランクフルによれば、人はその実存的空虚、心の空白を埋めるべく、さまざまな誤った方法で代償しようとします。フランクフルは、実存的空虚を人生の空虚さ、人生の究極的無意味さ、何のために生きているのかまったくわからなくなっている状態、と規程しています。¹³フランクフルは、それを囚人の生活の中で見、それは「意味」が人生で果たす役割への洞察をうみました。第二次大戦の後、彼は、現代社会に生きる人々にも、同じ現象を見ました。強制収容所の極悪の環境がなくても、人々は、実存的空虚さに陥っていたのは、衝撃的な発見でした。

人が、実存的空虚に陥ったとき、どのような症候を示すのでしょうか？フランクフルは、第一に倦怠、生の無意味さをあげます。人生は、試練と応戦のダイナミックな授受です。試練に応戦することを通して、自分自身のポテンシャルが開かれ、世界と他の人々への貢献をしてゆきます。自己発見と世界への貢献は同時になされます。試練は、それが、自分の力とのバランスが保たれる限り、人生を意味あるものにするのに不可欠の条件です。試練

¹² 前掲書 p.67

¹³ 前掲書 p. 105-06.

は、少なすぎれば人は飽き、あまりに大きすぎれば、無関心になります。解釈は、試練を調節する機能もあります。

試練が無意味なものとなった時、人は試練に対抗しようとする動機を失います。試練を理解すること、意味あるものに変える解釈の枠組みは、とても重要です。では、どうしたら試練が意味あるものになるのでしょうか？人によっては、哲学上のあらゆる問題に直面するかもしれません。神の存在、神義論、死後の世界、運、運命、世界の不確定性等です。言い換えれば、究極的には、哲学の問題をひもとき、人生を解く哲学的な解釈の枠組みを構築する必要に迫られるかもしません。宗教的な観点を取る人もあれば、不可知論的な立場を取る人もあるでしょう。哲学的な探求は、終わりのない探求です。それは探求そのものです。人生の意味は、そうした哲学的な問いを持つ人にとっては、哲学的な理解にそくしてさまざまな意味を提示するでしょう。

結論 人生問題への解釈学的なアプローチと統一思想

なぜ人生の問題は、複雑で、容易に答えられないのでしょうか？そこには大き分けて二つの理由があるように思います。

第一に、人生の意味は、各自が自分で答えてゆくことを通して開示されてゆくという点です。つまり、「人生の意味」は、開かれた問いであり、各自が自分の試練に「答えてゆく」形で、その人に開示されていくものであるということです。人には異なった十字架があり、肩の大きさが異なるように、異なった課題と責任をおって生まれ、生きてゆきます。そこには、その人にしか見えない「答え」があり、その人にしか出せない「答え」があります。例えば、三重苦に生まれたヘレン・ケラーの試練に答えを出せるのは、ヘレン・ケラー自身です。そこに人間の尊厳と絶対的な自由の領域があります。

第二に、人生の課題にはありとあらゆる哲学的な難問がかかわっていて、容易に答えが見いだせないという点です。宗教、精神医学、心理学、社会学その他の諸科学の成果を援用しながら、各自が、自分の哲学を構築し、それを解釈の枠組みとして、問いに対処せざるを得ません。そして、哲学的な理解は、それ自身が生涯にわたって深化し、それに伴って人生の意味も、深化してゆきます。意味というものは、このように流動的で、開かれたものであります。

統一思想が、どのような洞察を提示し、それが哲学的課題と個人の人生観構築に寄与するかは、今後の課題です。本論では、本性にのみ言及しましたが、自由、運命、神義論等、どうそれに統一思想が答えてゆくかは未知の課題です。本論では、ハイデッガーとフラン

クルを援用しながら、「意味をベースにしたアプローチ」すなわち人生の解釈学の可能性を模索しました。

主要参考文献

Csikszentmihalyi, Mihaly. *Good Business: Leadership, Flow, and the Making of Meaning*. New York: Viking, 2003

Frankl, Viktor E. *Man's Search for Meaning*. Boston: Beacon Press, 2006,

Heidegger, Martin. *Being and Time*. New York: Harper, 1962.